

事業名称	守れ！文化財～モノとヒトに光を灯す～		
実行委員会	「守れ！文化財～モノとヒトに光を灯す～」事業実行委員会		
中核館	新潟県立歴史博物館		
	住所	〒940-2035 新潟県長岡市関原町1丁目字権現堂 2247 番 2	
	TEL	0258-47-6130	FAX 0258-47-6136
	ホームページ	http://nbz.or.jp/	
構成団体	上越市立歴史博物館・京都府立聾学校・川村義肢株式会社・九州保健福祉大学		
事業開始時点の課題分析	<p>【課題①】これまで培われてきた障害者の教育活動や障害者支援の歴史については、盲聾学校の成立、手話教育の導入（認可）、点字ブロックの発明と敷設、パラリンピック大会の開催などと、個別には具体的に理解されるものの、必ずしも大局的な理解がなされてこなかった。</p> <p>【課題②】全国の支援学校や、その他博物館以外の施設には、障害者関連の歴史資料が全国に所在しながら、その多くは“文化財”としての認識がなされていない。また、保存と管理・活用に課題を抱えている。</p> <p>【課題③】学校が減少傾向にあるなかで、国内3番目の盲学校である高田盲学校も現在は福祉施設の中に資料が保管されている。閉校や休校といったコミュニティが消滅するなかでの、資料の継承について考えていく必要がある。</p>		
事業目的	<p>【課題①にたいしてー理解を広げる】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・関連資料の所在を確認しつつ、その歴史を大局的に把握する。 ・資料の価値を、学校教育史、障害者運動史、美術史、科学技術史など多角的な視点で再構築する。そしてこれらの成果を、展示等で公開し、ひろく一般に周知する。 <p>【課題②に対してー保存する・活用する】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料の保存上または活用上の観点からレプリカ製作を行い、活用方策を検討する。 <p>【課題③にたいしてーコミュニティをつくる】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生や市民等多様な主体を育み、資料保存や活用についての理解を形成する。また、非正規雇用等の若手学芸員の育成を図り、事業の発展、継承を模索する。 		
事業概要	<p>【課題①にたいしてーモノを編む/編集する/つなぐ/つむぐ/総合する】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障害者に関わる歴史資料の全容を把握しながら、整理・保存・活用方策を立案する。 ・全国の障害者に関わる歴史資料について、その価値づけや、現代的意義を明らかにしたうえで、展示として公開する。 <p>【課題②にたいしてー保存する・活用する】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・京都盲聾院関係資料、高田盲学校関連資料を核とし、保存・保管、活用に関する調査研究を進め、その活用方策・長期的な保存方策を検討する。 ・レプリカを製作し、活用と保存の方策を検討、実施する。 <p>【課題③にたいしてーコミュニティをつくる】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・レプリカ等を活用したワークショップを開催し、児童・生徒や教員あるいは市民への資料と博物館機能の理解を促し、資料の継承に関わる人を育成する。 		

<p>実施項目 ・ 実施体系</p>	<p>1. 「守れ！文化財～モノとヒトに光を灯す」事業 (1) 「守る！文化財～博物館のチカラ～」事業</p> <p>① 事業検討会議 ② 盲聾学校関係資料調査・保存事業 ③ 全国アンケートの実施・分析 ④ 国内所在資料調査 ⑤ レプリカの製作 ⑥ 広報物作成・発送 ⑦ ワークショップの企画・実施 ⑧ 展示 ⑨ シンポジウム ⑩ 報告書</p>
<p>実施後の 成果・効果等</p>	<p>【課題①にたいしてーモノを編集する】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ユニバーサル・ミュージアム関連展示を中心に、視察調査を実施。「障害」をキーワードに展示製作を行うに当たって、「障害」の多様性を意識しながら、如何に自分ごと化することの必要性を認識するなど、さまざまなヒントを得つつ、種々検討課題の抽出を行う必要を認識した。 ・これまでの活動を報告・総括するシンポジウムを開催し、成果を報告するとともに今後の課題を明らかにした。 <p>【課題②にたいしてー保存する・活用する】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「唾五十音字形手勢」のレプリカを製作した。それにより、原資料の利活用による劣化の進行を低減することが可能となった。 ・京都府立聾学校の資料については、指定外の資料について目録作成を継続。重要文化財以外の資料の取扱についての検討素材が出来上がりつつある。また、その保存環境の整備も進めているが、まだ害虫類の侵入など課題がある。 ・高田盲学校資料については資料の所在確認と、その内容調査を進めた。全体像把握が進行するとともに、今後上越市の指定文化財への道筋となりつつある。 <p>【課題③にたいしてーコミュニティをつくる】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・京都府立聾学校のワークショップでは、生徒に学校の文化財を活用して自らその歴史を物語る立場（「学校史ミニ屏風：学びの歴史を物語ろう」）を体験してもらい、文化財への理解をさらに深めてもらうことができた。 ・上越市でのワークショップでは、「手で味わう お茶会」と題し、視覚に頼らず、聴覚・触覚などさまざまな感覚で楽しめるお茶会を実施した。茶碗や土器、そのほかさまざまな資料をさわって確かめるもので、視覚や聴覚に「障害」のある方の参加も得て、多様な楽しみ方を理解することとなった。

【事業実績】

(1) ワークショップ（京都）

事業構成団体である京都府立聾学校において、中等部・高等部生徒を対象として、ワークショップを実施した。「学校史ミニ屏風：学びの歴史を物語ろう」として、重要文化財京都盲啞院関係資料などから屏風仕立ての学校史を各生徒が製作。それを発表し合い、さらに学びを深める授業とした。

- ・12月6日 ワークショップ（1回目）
- ・12月14日 ワークショップ（2回目）



生徒感想(抜粋)

- ・生徒が描いた絵が上手すぎて言葉が出ませんでした。100年以上前の先輩みたいに上手に描けたらいいな。
- ・古川先生が聾学校をたててくれて本当に感謝しています。

(2) ワークショップ（上越）

「手で味わう お茶会」と題し、視覚に頼らずお茶席を楽しんでもらうものとして実施。新潟県立歴史博物館のオリジナル干菓子（土器片型）を手の感触で味わい、さらに舌で味わい、また、土器の実物を手で味わうことで、さまざまな触体験を提供した。

- ・2月26日 プレワークショップ—事業関係者による試行
- ・3月13日 ワークショップ（写真）



参加者感想(抜粋)

- ・目が見えないのは不安だった。普段の茶道の稽古はとても目を頼りにしていたと気づいた。
- ・古川先生が聾学校をたててくれて本当に感謝しています。

(3) 資料調査・保存

- ①構成団体である上越市立歴史博物館とともに旧高田盲学校の資料を調査し、目録を作成した（12月24-26日）。
- ②京都府立聾学校の資料室の環境整備（保存）作業を行った（3月15日ほか）。

(4) 国内調査

国内のさまざまな関連資料の所在を確認するとともに、この事業の活動をどのように発信していくかその参考とすべく、「障害（者）」をキーワードに展示として何をどう見せるのかについて、国内の展示事例などに学んだ。

- ①三重県立美術館、徳島県立近代美術館などでは、ユニバーサルな視点での展示表現に関して視察を行った。
- ②当時者の視点などを探るべく、しょうけい館のほか、国立ハンセン病資料館「生活のデザイン」展などを視察した。
- ③パラリンピック・パラスポーツ資料関連として、日本オリンピックミュージアム、中京大学スポーツミュージアムなどを視察した。



三重県立美術館「美術にアクセス！一多感覚鑑賞のすすめ」



しょうけい館

(5) レプリカの制作

ワークショップや展示等に活用するため、京都盲唖院関係資料のうち、特に閲覧希望の多い資料についてレプリカを制作した。制作した「唖五十音字形手勢」は、現在の指文字とは違い、指でカタカナの文字を表現する伝達方法を示すもので、手話以前の聾教育の様子を伝える資料である。



(7) シンポジウムの開催・報告書の発行

シンポジウムを開催し、これまでの成果を報告するとともに、今後の課題を抽出した（会場実施とオンライン併用のハイブリッド開催）。

参加者感想(抜粋)

- ・難聴児の保護者をしています。今日のお話はどれも知らなかったことばかりでした。貴重な資料の数々、今後更に活用機会が増えることを願うばかりです。生徒たちのワークショップも非常に興味深く、ぜひほかの聾学校にも共有されてほしい学習活動だと感じました。
- ・学びの多い企画を具体化していただき、ありがとうございます。京都府立聾学校でのワークショップ、生徒たちが資料に向き合う機会を積み上げていらっしゃることに感銘しています。

また、報告書を発行し、全国の美術館・博物館等各所に送付することで、事業の内容を周知した。

